勇者召喚に巻き込まれた少年

鯖亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者召喚に巻き込まれた少年

【Ｎコード】
Ｎ５３２９Ｓ

【作者名】
鯖亀

【あらすじ】
異世界フロニャルドに召喚された鞍麻碧夜
「え、手違い！？事故っておいボケ姫！！」
友人シンクは勇者としてアオヤはプー
「ざけんな！誰がニートだコラァ！！」
彼の物語が今始まる（多分）

オリ主紹介（前書き）

随時更新予定
５／１６更新

オリ主紹介

鞍麻碧夜【クラマ・アオヤ】

１３歳

男

地球人（日独ハーフ）

黒髪碧眼

切るのが面倒な為髪を縛っているがチョンマゲの様でサムライと呼ばれている

目つきは鋭く常に怒っている様に見える

身長はシンクと同じ位

細身だが筋肉はある

武器：素手（中国古武術）、槍他大概の物は使える、仙気功術、紋章術、符術

紋章：龍の頭を模したモノ　色：白と黒（気功の影響？）

幼少期に中国旅行中に師父に出会い

その後親元を離れ弟子入り

修行と称したあらゆる無茶を乗り越え一年前に帰国

文武両覇の為頭は良い

シンクやベッキーとはクラスメイト

六歳の離れた妹がいるが持て余し気味（今だに血が繋がっていないと思われている）

子供や動物に懐かれ易いが本人は戸惑い気味

趣味は鍛練とサバイバル

日本に帰るまでどちらも一緒だと思っていた

ようこそ異世界さよなら日常

尊敬するクソジジもとい師父へ

どうもあなたの直弟子鞍麻碧夜【クラマ・アオヤ】です

中国の山奥であなたに出会い弟子入りしてからそろそろ八年そして
あなたの下を離れ一年

明日から中学校も春休みに入ます
式を途中早退して飛行機に乗る為に今は同じく途中早退したシンク・
イズミと共に

落ちています

ご安心下さい飛行機ではありません

生身です

ええ落ちているのは俺達二人だけです

そういえば昔あなたに修行と称して滝や崖から簀巻きにされ突き落
とされたのが懐かしいです
ええ本当…

しかも何か全然見覚えの無いというかあったら困る光景が眼下には

広がっています
まず見えるのは雲と森
まあここまでは普通です
その他に島が結構な数見えます
ただし全部もれなく空中に浮かんでやがります
そして多分原因は俺の背中に掴まっているこの犬
コイツが地面に剣を刺した瞬間に地面に穴が空いて俺とシンクはそこに落ちた
うん
何ともわかりやすい
「ねえ、ねえアオヤちょちょっとコレたか高すぎない！」
「喚くなシンク腹括れ」
「喚くなって、ねえアオヤ何とかならない」
「何とかねぇ。おい犬着地とかって大丈夫なんだよな？」
背中に掴まってる犬に試しに話しかけると
「ワンッ！」
「割と大丈夫そうだな」

「ええっ！アオヤ言葉わかるの！？」
「何となくな。さてそろそろ着くみたいだぞ」
「うえぇまだ心の準備が…」

「ハァハァハァハァ…」

少女は石段を駆け祭壇を目指す

勇者召喚

自分達の切れる最良にして最後の切り札

祭壇に向かって落ちてくる流星

アレが私の…私達のビスコッティの勇者様

石段を登りきるのと光が降りるのは同時だった

私は慌て身嗜みを整える

そして光が消え中から勇者様が……

「ようこそフロニャルドへ勇者さ…ま…あ……れ？」二人？

よし！

片膝をついて着地成功

隣ではシンクが着地を失敗させて尻餅をついている

そして周囲を包んでいた光が消え目の前には

女の子？

「ようこそフロニャルドへ勇者さ…ま…あ……れ？」

動作停止（フリーズ）したようだ

しかしこの子の頭についてるのって確かクラスの奴の言葉を借りるなら獣耳

しかも尻尾まで

しかも結構美少女クラスの野郎共なら発狂するレベル

だがその美貌は今どこか引き攣っている

「ねぇアオヤどうなってるの？」

「知らねえよ、少しは自分の脳筋使って考えろ」

「う～～～～ん無理さっぱりわかんない」

さすが脳筋すぐに思考をやめやがった

「ならコレ再起動して聞くしかないか」
俺は立ち上がり少女の目の前で
パンッ
拍手を打つ
「はうわぁ…あのその…」
「深呼吸でもして落ち着け」
言われた通り深呼吸を始める少女
やはり言葉は通じているようだ
「ありがとうございます何とか落ち着きました」
頭を下げる少女
「それよりまず現状説明を可能な限りお願いできますか」
「はい、歩きながらでよろしいでしょうか」
「構いません。シンク行くぞ」
「あ、待ってよアオヤ」
「なるほどだいたいは理解したが結局俺は巻き込まれただけだと」
石段を降りながら少女ミルヒオーレ・F・ビスコッティ

彼女いわくここはフロニャルドのビスコッティ共和国で彼女はそこの領主で今ビスコッティ共和国はガレット獅子団領国に『戦』で連敗中で次負けると城を落とされる様だ
そこで彼女は各領主しか行えない勇者召喚を実行
勇者としてシンクを召喚したのだが俺も巻き込まれたという訳らしい

一通り説明が終わった時遠くで花火が上がる

「大変！もう始まってしまいました」
姫さんは駆け足【本人は走って】で石段を降り始めた

「ハーラン！」

そう言って石段を降りきった所にいる鳥っぽい何かに駆け寄る姫さん

「えーっとコレは？」

シンクが姫さんに聞くと

「私のセルクルのハーランです。セルクルをご存知ありませんか？」

「似たような生き物なら」
「地元にはいなかったかな」

あほシンクこんなのベッキーの持ってたゲームの中位しかいないだろうが

「勇者様乗って下さい」

ハーランに跨がった姫さんがシンクを促す

「うん、あ、アオヤはどうするの？」
「そ、そうでした…どうしましょう」
「走って行きますからお気になさらず」
「わかりました。タツマキ、アオヤさんをお願いしますね」
「ワン！」
そう言ってハーランを走らせる姫さん
「タツマキだったかよろしくな」
「ワンッ！」
残された一人と一匹
「で、どこに行きゃ良いんだ？」
タツマキは崖の方を向く
その先には
「あの城を目指せば良いのか」
「ワンッ！」
あそこまで走るのは流石に面倒だな

「あ～っと確かバックの中にアレが入ってたはず……」
大きめのバックを漁り蛍光色の布を引っ張りだす
布を広げ布に着いた紐を伸ばし先に着いたベルトをしめる
「タツマキこれに入ってくれるか」
そう言うとタツマキは大人しくバックに頭だけ出して入る
そのバックを背負い風向きを確認する
「ちょうど城の方に向かって吹いてるな」
風向きを確認するとアオヤは崖に向かって走り出す
アオヤと繋がった布は風を受けるとその正体を現した
パラグライダー
僅かな助走と上昇気流に乗って滑空するパラシュートの発展形
ただし本来付いているハーネスは無く代わりにベルトで身体を繋いでいる
理由は持ち運びを優先させた結果この形になった
そしてアオヤは空を飛んだ

普通なら打ち首だよなやっぱｂｙアオヤ

フィリアンノ城内

リコッタ・エルマールは唖然とした

ミルヒオーレ姫が勇者様を連れて戻って来たのはほんの数分前

その時姫様が言っていた事

「もう一人お城に来るはずなので応対を頼みますねリコッタ」

姫様はその人は多分歩いて来ると言っていたけど

「ちょ、どいたどいたマジでヤバいヤバいヤバいヤバい！」

蛍光色の布に吊り下がる形で空を飛んでいるのはおそらく姫様の言った御人

姫様のハーランや紋章を使用しない飛行法

一瞬ソレに意識をとられて回避行動が遅れた

結果

「おいそこのちびっ子伏せろ伏せろ！！」

「ふえ、ふえええぇぇぇぇぇっっっ！！！！」

ドンッ！ゴロゴロゴロゴロゴッ！

「痛～～～～～っ」

パラグライダーをすんでの所でパージ出来たが逃げ遅れたちびっ子を巻き込み着地失敗

（な、情けねぇ……）

とりあえずちびっ子は怪我しない様に庇ったけど大丈夫か

「おい、ちびっ子怪我してないか？」

「だ、大丈…夫…であります～…」

目を回しながらフラフラと立ち上がるちびっ子

「あ、タツマキ大丈夫か？」

バックの中のタツマキに声をかける

「ワンッ」

（大丈夫そうだ。で、ここが…）

周囲を見回すと

怪訝そうな眼差しを向けるメイドさん達

ビックリして腰を抜かしている白衣の集団

槍を構えて睨む鎧の人達

そしてさっき来たばかりで状況がさっぱりな姫さん

「あー、お邪魔してます」

とりあえず姫さんに挨拶

「あ、えっと思ったより速かったですね？」

返す姫さん

よかった～

ここでどちら様？的なボケをかまされたらどうしようかと思ったよ

ふと姫さんが何か思いついたらしく

「アオヤさんお願いがあります」

「はい？」

「今大変なニュースが入りました！ミルヒオーレ姫がこの決戦に勇者召喚を使用しました！コレはスゴイ戦場に勇者が現れるのを目にするのは私も始めてです」

実況席のフランボワーズは興奮しながらニュースを読み上げる

「さあ、ビスコッティの勇者はどんな勇者だぁ！！」

その報を聞き前線のロランは安堵の表情を浮かべエクレールは驚いた

そしてリコッタからマイクを受け取ったミルヒオーレ姫が

「ビスコッティの皆さん、ガレット獅子団領の皆さん、お待たせしました」

戦場では皆ミルヒオーレ姫の言葉に耳を傾け手を止める

「近頃敗戦続きの我等がビスコッティですが、そんな残念展開は今日限りにお終いです！ビスコッティに希望と勝利を齎してくれる素敵な勇者様がお仲間と共に来て下さいましたから」

映像中継用スフィアに映し出される二人の姿

一人は外は白内は赤の外套に身を包み左手に銀の篭手右手に白い棒

頭に青い鉢巻きを着けた金髪の少年

もう一人は異世界の衣装【中国服】に両手に篭手を着けた黒髪の少年

二人は櫓の両端に立ち背を向けているので顔は見えない

「華麗に鮮烈に戦場に御登場頂きましょう」

花火が打ち上がり

「フッ」

金髪の少年が棒を空高く投げるのを合図に二人は飛び降り

着地

一人は投げた棒を掴むと器用に回転させそして構える
もう一人は着地と同時に左右の廻し蹴りそして構える

「姫様からのお呼びに与り勇者シンク」

「同じく拳士アオヤ」

「「只今、顕参！！！」」

普通なら打ち首だよなやっぱｂｙアオヤ（後書き）

アニメオンリーだと資料が無くてキツイ（動画消されるし）

初陣、獅子姫と相見える

「ゆ、ゆう、勇者降臨！ここフロニャルドで国を治める王や領主にのみ許された勇者召喚！「私も見るのは始めてです」そおおう、そんな稀少な勇者が今我々の目の前に現れましたぁぁぁぁ！！！」

フィリアンノ城では

「あの姫様あの勇者様と拳士様？こっちの戦の作法とか知らないのでありますよね。大丈夫でしょうか？」

「大丈夫。勇者様には道々お伝えしましたし今はちゃんとロランが確認をしてくれています」

レイクフィールド内最終ステージ

「うん、ルールもルートもしっかり覚えてくれている様だね。君も大丈夫かな？」

「はい姫様が教えてくれました」

「こっちは大丈夫です」

「君達は召喚されて姫様と会ってどう思った」

「可愛くて優しそうな素敵な姫様だなって思いました」

「とりあえず右に同じく（嘘）」

ロランさんは俺達の肩に手を置き満足そうに

「素晴らしい！」

その時フィールドを駆ける敵の一団が雄叫びと共に迫る

「ではお二方前に進んで先陣のエクレールと合流を！」

「「はい（承知）！」」

「シンク・イズミ……行きます」

「クラマアオヤ……出る」

数分前

フィリアンノ城にて

「アオヤさんお願いがあります」

「はい？」

「もし宜しければ勇者様の初陣のサポートをお願い出来ませんか？」

「はぁ別に構いませんが…」

「ありがとうございます！早速衣装の方を…」

「あ、それなら自前のがあるんで篭手か何か用意してくれればそれで」

そう言ってバックから修行用の中国服を掴み見せる

「わかりました。ではルール等の説明を…」

「それも現場の人に聞きますから」

「それじゃあお願いしますね」

以上

回想終わり

回想してる間にシンクの奴が無双を決め大分先に進んでる

「は、え、えええぇぇ！は、速い何が起きたのかさっぱりですがこの勇者何かスゴイぞ！！そして拳士仕事しろ！！！」

「うるせーよ」

実況に文句を言いながらねこたまの山を避けてシンクを追う

お、やっと追い付いたか

あの緑の子がエクレールか

結構可愛いじゃん

姫と良いちびっ子と良いあの城レベル高ぇな

等とぼんやり見ていると

「喰らえぇ！グハッ」
裏拳一撃
「サポートだけってのもな～」
その時
ドオオォォォォッッッン！
先陣二人が放った気の様な物が敵を蹴散らした
「すっげー、オーイ！シンク何だよ今の？」
シンクの方へ近づく
「あ、アオヤ今のは紋章砲って言ってスゴイ疲れるよ」
シンクが顔を上げた時
粉塵の向こうに殺気を感じシンク達の前に出る
「どけ！二人共！！！」
粉塵を蹴散らし迫る蒼い閃光
それに対し両腕を交差させ防ぐ
数秒の拮抗の後何とか閃光を逸らす
逸れた閃光は近くの浮き島に当たるとただの矢に戻った

だが気を抜けない
今のを射った奴は相当の使い手
しかも
（手加減された…）
「ほんのチビッと期待をして来てはみたが所詮は犬姫の手下か」
そこには黒いセルクルに跨がった白髪の美女が見下ろしていた
「レオンミシェリ姫…」なるほど向こうの大将がわざわざ出ばってきた訳か
レオンミシェリ姫は持っていた弓を投げ捨てると人差し指を口の前に持っていき
「チッチッ、姫等と気安う呼んで貰っては困るのう。」
「我が名はレオンミシェリ・ガレット・デ・ロワ。ガレット獅子団領国の王にして百獣王の騎士」
セルクルが一歩踏み出す
「閣下と呼ばんか！この無礼者がぁ！！！
腕を組みあたかも咆哮の様に言い放つと背後に獅子を象った紋章が

顕れた

師父、美女です！美女がいます！！ｂｙアオヤ

「閣下と呼ばんか！この無礼者がぁ！！！」

うわぁスゲェこの距離で気圧されるとか師父以外初めてだ

しかも巨乳美女（ネコミミ尻尾付き）

しかも巨乳美女

大事な事だから二度言わせて貰う

ついでにエクレールさんを一瞥

「……フゥ」

「貴様っ！今どこ見て溜め息ついたか言ってみろ！！！」

騒ぐ垂れ耳を放置してレオンミシェリ姫を睨む

「ほぉ、面白いな貴様は、この百獣王の騎士と呼ばれるワシの咆哮を受け流すとは」

挑発して足止めすればシンクや垂れ耳が雑兵を片付ける時間くらい作れるか

「咆哮？てっきり子猫の威嚇かと思いましたよ。子猫姫」「…っ！良かろう、ワシが子猫かどうか貴様に教えてくれる！！」

挑発大成功

セルクルから飛び降りると戦斧片手に突っ込んでくる

「何ならその喉元摩って差し上げましょうか？子猫姫様」

「ほざきおったなっ！」

振りかぶった戦斧を横一閃

それをバク転で避ける

「逃がすかぁぁぁぁっ！！！」

真上からの一撃

今度は避けずに太極拳の要領で逸らす

「なっ！」

戦斧は勢いのまま地面を砕く

こっちはその間に子猫姫と距離をとる

「なあああんということでしょうっ！我等がレオ閣下がまるで、まるで本当に子猫扱いだぁぁぁ！！！」

実況席のフランボワーズの絶叫が戦場に響き渡る

「一体全体勇者と言いあの拳士？と言い凄すぎだぁぁぁ！」

「ええ、特にあの拳士、アオヤ君でしたか彼はおそらく勇者殿より荒事に馴れている様に見えますね」

神妙な面持ちでスフィアを見つめるバナード将軍

「閣下もすっかり熱くなられて……このままだといけませんねぇ」

その隣で心配そうに頬に手を当てるビオレ

「おい勇者貴様の友人は本当に人間なのか？それとも物の気の類いなのか？」

目の前の今なお継続中の攻防から視線を逸らさず聞くエクレール

「一応まだ人間の予定だ師父は人外だけどって言ってたよ前に」

それに答えるシンク

「その師父とは何者なんだ一体…」

「アオヤの話だと年中桃の花が満開のとこに住む歳をとらず水面を歩き宙を駆け地を砕く酔っ払いのボケ爺だって」

勇者よそれを人は仙人もしくは妖怪爺と言うのだよ

「ほらほら全然当たらないよ子猫姫」

「貴様あああぁぁぁっ！！！今すぐその口封じてくれるわぁぁぁぁっ！！！！！」

戦斧をブンブン振り回すレオ姫

それら全てを霧の様に避けるアオヤ

しかも挑発付きで

「ええい！チョコマカと避けをって！！これならどうじゃっ！！！！」

姫の背に浮かぶ光り輝く紋章

なるほどそういう風に使うのか

「獅子王炎陣！！」

振り上げた戦斧を渾身の力で振り下ろす

地面から複数の火柱が上がる

「大っ爆っ破っ！！！！」

子猫姫を中心に気が膨れ上がり次の瞬間それらが一気に爆炎に変わる

「面白いな。紋章砲とやらはこんな事も出来るのか……なら」

目の前に爆炎の壁が迫る

「受けて立つ！！」

構えたまま壁に飲まれるアオヤ

決着……なのか？

「決まったぁぁぁぁっ！！！レオ閣下の超絶紋章砲【獅子王炎陣大爆破】これをまともに受けて立ってられる者は一人もいない！ただ味方にも被害が出るのはたまに傷ですが…」

煙の中には悠然と佇むレオンミシェリ閣下

「オイ！フランボワーズ、奴はきっちり死んだか！」

周囲には巻き添えになった兵達の成れの果てばかりで肝心の敵の姿が見えない

「えーっと拳士はどこに～……」

完全に煙が晴れたところでフランボワーズは身を乗り出し捜す

そして異変に気づく

一カ所だけ地面がえぐれていない場所があった

しかもそこに立つ人物は

「な、な、何という事でしょぉぉぉぉぉっ！！！無傷です！あの拳士は未だに無傷です！！！」

服に少し煤がついてはいるが無傷の拳士が立っていた

【仙気功術・穿虚咆（せんきこうじゅつ・せんこほう）】

体内で練り上げた気を空気と共に口から打ち出す
打ち出された気は空気を押し退ける為人為的に突風が発生する
炎に飲まれる直前にアオヤはこれを使い自分の周囲の炎や降り注ぐ瓦礫を防いでいた

「何だもう終わりか…」

アオヤが一歩踏み出す

「くっ！」

レオンミシェリはそれだけで身体が勝手に逃げようとする

「紋章砲とやら試してみるか」

今までの気とは違い外側からも力を取り込むイメージをする
外と内の力を混ぜ合わせるそして混ぜた力を全身に纏う
そして動く
幾つかのポーズを決めた後
「エターナルネギフィーバーーーーーーーッッ！！！」

全身から光線を放つ

そして光線は呆然としているレオンミシェリに直撃

爆散

「すげぇな師父の読んでた漫画の技が使えるとは……」

「大変な事が先程から立て続けに起き私の処理能力も限界になってきておりますっ！てかマジで今何が起きたんだーーっ！！！！」

ガレット側はフランボワーズを除き全員茫然自失

ビスコッティ側も何が起きたのかわからず唖然としている

「あれ？もしかしなくてもやり過ぎました？？」

アオヤも周りの空気に「やっちゃった？」的な感じに首を傾げる

そこにビスコッティの垂れ耳親衛隊長ことエクレール・マルティノッジが駆けてくる

そして

「やり過ぎだぁぁぁぁぁっ！！このスットコ拳士がぁぁぁぁぁぁっっ！！！」

華麗に飛び膝蹴りをくらわせる

顔面に

吹き飛ぶアオヤ

空中で二、三回回転して頭からスライディング着地

ソレを見ていたフランボワーズが思い出したように

「閣下！レオンミシェリ閣下！御無事ですか？返事をして下さいっ！閣下ぁーっ！」

叫ぶと

「喧しいぞフランボワーズ、静かにせんか！」

瓦礫を退けて立ち上がるレオンミシェリ

「全く武器や防具はおろか外套まで消し飛ばされるとは思わなかったわ」

レオンミシェリの恰好はインナーにズボンだけの結構刺激的な恰好であった

「流石にこれ以上はサービスが過ぎるの。仕方ない降参じゃ」

レオンミシェリの降参宣言の後
アホ勇者と垂れ耳親衛隊長の活躍によりビスコッティ側の逆転勝利で戦の幕は下りたのだが

マスコミはこぞって勇者と拳士にインタビューしようと詰め寄るがロランさんにあしらわれていた

その勇者と拳士は…

「おい聞いているのか馬鹿拳士にアホ勇者！！！」

エクレールに説教を受けていた

アオヤはわかるが何故シンクまで説教されているかと言うと

エクレールの恰好に理由がある

外套をバスタオルの様に巻いただけ

つまり

「どこに力加減間違えて味方を脱がす勇者がいると言うのだ！」

その時アオヤはレオンミシェリに土下座で暴言の数々を謝罪してい

た

決着……なのか？（後書き）

ネタ技は出来そうだからやった後悔も反省もしてない

帰れない？へーそう大変だね～

垂れ耳からの説教が終わった時シンクの言った一言で改めて状況を再把握するはめになった
その一言とは

「あの～そろそろ一度家に帰るなり連絡なりしたいんだけど…」

このアホはこの状況で簡単に帰れると思っていたらしい

しかも

勇者召喚をした本人ことしょんぼり姫も帰れない事を知らなかったらしい

類は友を呼ぶというが

アホ姫はアホ勇者を召喚する

現在これが成立している

俺は別に帰れなくても気にしない

将来仙人になるかならないかが異世界に骨を埋めるに代わっただけだし

なら先ずは字を覚えないとな

そんな事を考えていたら垂れ耳から城下街に行かないかと誘われた
どうやら気分転換にとの気遣いらしい
俺は茸の生えそうなシンクを引きずり垂れ耳の後を追う

「一体いつまでそうしている気だ鬱陶しい」
今はベンチに座って街の様子を眺めているのだが
「だって帰れないんだよ！アオヤは良いの？家族や友達とか気にならないの！」
「気にしてもしょうがねぇし帰れなくても気にしない。少しは腹括れ」
「うーでもでも……」
辛気臭いし鬱陶しい
「そうだぞそれに阿呆とは言え貴様は勇者だ待遇は国賓並だぞ」
「あ、やっぱそういう扱いなんだちなみに俺は？」
試しに聞いてみる
「貴様は巻き込まれただけだしな今のとこソイツのオマケだ」
マジかよシンクのオマケって

「ああついでにこれを渡しておく今回の報奨金だ」
そう言って俺達に袋を一つずつ押し付けた
「報奨金なんか出るのかあの戦は」
受け取った袋は結構重くシンクより心なしか大きかった
「まあなそれに貴様は一人でレオンミシェリ姫を倒したからな色がついてるはずだ」
成る程な
「貴様等の帰還に関してはリコが動いてくれているんだ心配するな」
ああのちびっ子か
「とりあえずは露店でも冷やかして時間を潰すのが一番だな」
すると先程まで俯いて何か呟いていたシンクが顔上げ
「うん帰るまでは勇者として皆をしょんぼりさせない為に出来る事を頑張ってみるよ」
どうやら持ち前のポジティブ思考で持ち直したらしい
今俺達は露店を冷やかしながら垂れ耳からこの世界の戦について聞いている
焼肉？串を食べ歩きながら丁寧にシンクにもわかりやすく説明していく

それを聞いていると
「優しいなぁ垂れ耳は…」
等と呟いてしまった
聞こえなかったらよかったのだがあの耳は結構良かったらしく
「き、きき、貴様は突然何を言い出すんだっ！？」
顔を真っ赤にして指を指す
それだけなら大変可愛らしい動作だろう
前動作で串を人の眉間に投擲していなければ
もちろん人差し指と中指で挟んで止めたが
「危ねぇだろうがそれともこれがこの世界流の照れ隠しかよ！」
「うるさいっ！貴様が急におかしなことを言うからだ、このスットコ拳士！」
え～独り言の上褒めただけなのに何この仕打ち
これが師父の言うツンデレか？
「それよりそろそろリコの所に行くぞ。案外何か進展があるやもしれんからな」
そう言ってツンデレ？垂れ耳は一人でさっさと歩いていってしまう
「ちょっと待てや！お前がいないと俺達十秒で迷子になんぞ」

「そうだよエクレール待ってよ～」

このちびっ子天才過ぎっぞ

「本っ当ーに申し訳ないであります」
うわぁすげぇ罪悪感…

垂れ耳に連れられちびっ子の所に来たんだが
俺達を見つけるなり何度も頭を下げて謝っている
ちびっ子にここまでされると何かこっちが悪いことしてる感じがする
なぜだ…

シンクも居心地悪そうだ

「あ～あんまし気に病むな最低一人向こうに帰れれば御の字だからな」

そう言って頭を撫でてやる
「おい、最低一人とはどういう事だ」

「そりゃあコイツ一人って事だが」

シンクを指差す

「それじゃあ貴様はどうする気だ」

「まあとりあえず資金と知識が手に入るまではこの国に居るかもな」

しかしなんだちびっ子撫でてると目茶苦茶癒される
そして話についていけないアホが突然
「僕は十六日後に帰れるなら勇者やってみるよ」
流石シンク人の話を聞いちゃいねぇな
「それからリコッタ、召喚された穴のとこに行けば電波通ってないかな？」
そう言って絶賛圏外中の携帯を見せる
「電…波…？」
ヤベーマジで可愛いな畜生
「イダッ！イデデデッ！！痛いよアオヤッ！」
そう言って召喚陣の中心から身体を抜くシンク
今シンクの希望で召喚された穴のある召喚台まで来ている
「耐えろよ。耐えて堪えてそして絶えろ。シンクお前にはきっと出来るだから絶えろ」
「ねぇ途中からニュアンスが違う気がするんだけど」

「アオヤさーんこっちの準備出来たでありますよ～」
ちびっ子は何か向こうの中継車の様な機械をセルクルに引かせここに来ている
ついでに垂れ耳も
「じゃあ頼むぜちびっ子」
そう言うとちびっ子は何やら不満そうな顔をしながらレバーを引き始めると駆動音と共に発光するアンテナ？
そして携帯を開いたシンクが
「繋がった！すごい！すごいよリコッタ！」
シンクがベッキーに電話をかけているとそれを熱心に見つめるちびっ子がいた
だがちびっ子の視線はシンクではなく携帯にのみ向けられていた
「携帯に興味があるのか？」
そう聞くと
「はい！自分は見たことのない装置や技術を見ると研究心と尻尾の付け根がきゅうきゅうとなるのでありますよ！」
すっげえ眼を輝かせて力説された
俺はバックから自分の携帯を取り出すとそれをちびっ子に手渡す

「ならコレやるからアッチは諦めろ」
「本当に良いんでありますかっ！？」
流石に帰るまで定期的に使うであろうシンクの携帯をバラされてはシンクではなくベッキーが可哀相だ
「ついでにコレも渡しておこう帰る気のない俺には必要ないからな」
そう言って携帯の充電器も渡す
「コレは何でありますか？」
「充電器って言って携帯の動力源を補充する為の物？かな」
「ありがとうであります。戻ったらその電話？と充電器？をバラしてみるであります」

さてと垂れ耳に聞きたい事があるんだがあいつどこ行った
周囲を見回すとフロニャ周波増幅機？だったかに付いた画面に向かって何か話をしている
もしかしてアレ電話か？それもテレビ電話ではあるまいな
確かコレをちびっ子は五歳で発明したと言っていた
おいおい天才にも程があるぞ
「それは本当ですか！」
今まで落ち着いて話をしていた垂れ耳のテンションが急に上がる

「エクレ何かあったでありますか？」

「ダルキアン卿と我らの親友ユキカゼが今日明日には帰ってくるそうだ！」

「ユッキーが帰ってくるでありますか！」

ちびっ子のテンションも上がる

「誰？」

聞くとちびっ子が

「ダルキアン卿はビスコッティ最強の騎士にして隠密部隊の頭目、ユッキーは私達の親友で隠密部隊の筆頭なんでありますよ」うんさっぱりわからん

今日明日には顔を合わせるから別に良いか

それより

「垂れ耳、自分用の武器とセルクルが欲しいんだが…」

「わかった城に戻ったら担当者に聞いてみよう、後垂れ耳言うな！」

一方、勇者は…

「……うん……うんじゃあまたってどうしたの皆？」

軽く存在が薄くなっていた

え、姫さん誘拐されたの？ヤバくね？

城に戻ってからまず垂れ耳とセルクルの小屋に行き自分のセルクルを選ばせてもらった

うんマジでビスコッティがヌルイのか国賓待遇なのかわかんねぇ

仮にもここのセルクルって軍馬みたいなもんだろ

え、あ、そう乗り手がいないから余ってる

そういう事なら遠慮なく

居ました

何かスンゲェ～のが二羽？

雰囲気からまず違う

片や真っ赤で他よりちょっとデカイ何より脚が太い

どうみても戦向き

片や全身漆黒で頭の毛が白い担当者曰く他のセルクルの倍は速く走れるそうだ

どちらも気性が荒く気にいらないと乗り手を振り落とすそうだ

が今その二羽は……

めっちゃ懐いてます

担当者の開いた口が塞がりません

でいつの間にかコイツ等を貰いました

そりゃ俺だって手伸ばしただけで向こうから来るとは思わなかったさ

まあ昔から馬や熊何かはあったけどさ（あるんかいっ！）

異世界の動物？にも懐かれるって俺別にムツゴロウ王国とか目指しちゃいないんだが

とりあえず名前を付けないといかんらしい

赤い方はアレに決定だろう

黒い方は…

師父の好きなゲームに確か良いのがあったな、うん

武器は垂れ耳が言うには今日はもう戦は終わったので明日でも間に合うだろうとの事で街に戻って屋台巡り

シンクは姫さんの戦勝コンサートで目立つだろうからと風呂に向かった

俺は戦後直ぐに水浴びしたから良いらしい

シンクと別れ街に入ってから二十分後・・・

俺はアホ勇者を一人にしたことを心底後悔する事になった

それは垂れ耳も同じだったようだ

『……僕は姫様に喚んでもらったビスコッティの勇者シンクだ！どこの誰とだって戦ってやる！』

隣で串を食べていた垂れ耳は早かった

「おいアオヤ、貴様はリコと一緒に武器庫へ行け」

「お前はどうすんだ？」

「私はあのアホを連れてくるセルクルの小屋で落ち合うぞ！」

「承知した」

「エクレほどほどにでありますよ～」

背中に背負ったちびっ子が言うが多分聞こえてない

そして垂れ耳は一人城に向け風になった

冗談抜きで…

さあ奪還戦の時間です

俺達は、四人で姫さんの救出に向かっている

メンツは垂れ耳、ちびっ子、俺、そして…

「だから本当にゴメンってば～」

アホの勇者シンクである

しかし恐ろし世界だ

まさか宣戦布告さえすれば要人の誘拐でさえ興行の内になるのだから

「アオヤさんはセルクルに乗るの上手ですね」

隣りを並走しているちびっ子がそんなことを聞いてきた

「まあ馬や熊何かには乗ったことあるからな」

ちなみにアホは今現在垂れ耳に説教されている

「それにコイツが上手く走ってくれてるからな」

そう言って相棒の首を撫でる

今回騎乗しているのは赤い方

コイツなら乗ったままでも十分戦えるからだ

「さあ、赤兎お前の初陣だ！派手に征くぜっ！！」

ミオン砦正門前

ここにガレット騎士団の精鋭が隊列を整え襲撃に備えていた

「なあまだ来ないのかな？」

「まだなんじゃね」

が、いくら精鋭と言ってもモブはモブ

私語がそこかしこで聞こえる

その時

「敵襲ぅぅぅぅぅぅっ！数は三！垂れ耳隊長に拳士それに…勇者です！！」

「そのまま突っ込んできますっ！」

「んじゃあ道を作るぜ！」

「頼むぞアオヤ」

「お願いアオヤ」

「跳べええぇぇぇぇぇぇセキトオォォォォォォォォッッ！！！！」

俺を乗せたまま跳躍する赤兎

さらに紋章術でブーストする

ここまでやるとほとんど飛翔と変わらない

俺は赤兎に積んだ槍を手に持ちフロニャ力を込める

今度はそれを正門に向けて

「ウオリャァァァァァァァァァッッッ！！！！」

全力で投げる

白と黒の螺旋を描きながら正門を吹き飛ばし爆発

巻き込まれたモブが猫玉になり飛んでいく

ぶっちゃけやりすぎである

さらに追い打ちをかけるように

「もういっちょおぉぉぉぉ！！！」

着地してからもう一本の槍を投げる
これで正門までの敵はゼロ
「「オオオオオォォォォォォォ！！！」」
正門まで一気に駆け抜ける二騎のセルクル
残った一騎は正門前に陣取り
「さぁてお前らの相手は仙士（せんし）アオヤとその愛騎セキトが請けてやる。
我らを討ち取る気概のあるものはかかってこいっ！」

そんな様子を遠目に酒盛りをしている者が一人
「見たことの無い顔でござるがなかなか腕の立つ若者でござるな」
ブリオッシュ・ダルキアン
彼女こそ現在ビスコッティに所属する最強の騎士であり
大陸最強の武人

一応隠密の頭領もしている
忍んでないけど
「オヤカタ様～私達は参加しなくてもよろしいのですか？」
金髪美女ことユキカゼ・パネトーネが聞いてみる
「いや～あの様子では援軍の必要はなさそうでござるよ」
正門前で転がるケモノ玉を見ながら返す
「へ～凄い人ですね～いつ騎士団に入ったんでしょう？」
「いや、どうやらそうではないようでござるよ」
「どういうことですか？」
「あの御人はおそらく異世界から召喚された者でござる。ただパラディオンを使っていないのが気になるでござるが…」
「それは確かに気になりますね…」
「ワンッ！」
鳴き声に振り向くとふたりの後ろに息を切らせた子犬が一匹
「ホムラではないか。早かったでござるな」
「ワン」

ホムラをよく見ると首に書簡が括り付けられていた

ブリオッシュはそれを取り中を見る

「ほう、これはまた面白い事になっているようでござるな」

仙士VS若本将軍

「ウオォリャァァァァァァッ！」

「ハァァァッ！」

ぶつかり合う戦斧と二振りの槍

バキンッ

直後に砕け散るのは二振りの槍の方

「ちっ…凄まじい厄日だな畜生」

槍を投げ捨て代わりに近くに刺さった剣をとる

「貴様の実力はそんなもんじゃないだろう、本気でかかってこんか！」

うぜー

中で足止め食らってたアホと垂れ耳を行かせる為にわざわざ閉じた門をブチ破って来たのに何で相手が…何で相手が…

「猫耳装備のゴツいオッサンなんだよおぉぉぉぉぉ！！」

畜生…中にいるのがジュノワーズとか言う三人組だったらよかったのに

「こんな事なら外でユッキーやゴザルさんと雑魚の掃討してればよかった」

そう！あの素晴らしきお乳様と共同作業

今からでも遅くはないはず…

その時頭の上から爆炎と轟音が襲い一瞬気をとられる

「隙有りぃいいいいっ！」

その隙を逃すオッサンではなく一気に間合いを詰められそのまま戦斧の一撃が迫る

「チッ、仙気功術（せんきこうじゅつ）・地龍脚（ちりゅうきゃく）！！」

叫びながら一歩踏み込むと地面が割れオッサンは体勢を崩し斧が振れない

「コイツはおまけだ！」

体勢を崩したオッサンの腹に気をたっぷり込めた蹴りを放つと

本来人が描いてはいけないくらい綺麗な放物線を描き吹き飛んでいく

「アオヤ殿ー！敵増援数は一でござるよー！」

いつの間に登ったのか城壁の上からユッキーが警告をくれる

直後

「道を開けえぇぇぇぇいっっ！！！」

声と共にブチ破られた門から青いセルクルが駆けてくる

「こんな所まで何のご用ですかレオンミシェリ閣下」

俺が乗り手に声をかけると案の定

「貴様か拳士。ところでゴドウィンはどうした？」

獅子姫ことレオンミシェリ閣下が乗っていた

俺は黙って先程オッサンの飛んでいった方を指差すと

「ゴドウィン！いつまで寝ておる、さっさと起きんかっ！」

閣下の褐が響くと瓦礫の中から鎧に穴の空いたオッサンが出て来た

「か、閣下これはその……」

「言い訳は良い追て来い、貴様もだ拳士」

「ヤー（°・x・）ゝ」

何か怒っているらしく昼間の倍の迫力に思わず敬礼してしまった

「閣下これからどちらに…」

いやオッサンそんな分かりきったこと聞くなよ

「この戦を始めた馬鹿二匹の所じゃ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5329s/

勇者召喚に巻き込まれた少年

2011年6月26日10時09分発行